



「はあ。」

所属するテニス部で、ペアを組んでいる豊から、
「練習試合までの二週間、ふたりで毎日、朝練をしよう。」

というさそいを受けたとき、孝之はとっさに大きなため息をついてしまった。テニス部は、顧問の赤塚先生にたのんで、自主的に朝練ができることになっている。県大会出場を目標にしている豊にとっては、練習試合といえどもおろそかにできないということらしい。放課後の部活動の練習も最近ハードになってきて、帰宅後夕飯を食べて宿題を済ませると、かなり時間が経ってしまう毎日だ。こんなに練習していても県大会出場は難しいのが現実である。そう考えると朝練が面倒になってしまいう自分もいたが、やる気に満ちた豊の表情を見て、思わずうなずいてしまった。これからの毎日を見ると、孝之はもう一度大きなため息をつかずにはいられなかった。

朝練が始まってからの三日間は、順調だった。しかし、四日目にねぼうをしてしまい、朝練に遅刻してしまった。

(昨夜は、ちょっと夜ふかししちゃったな。)

同級生とのメールのやりとりで夢中になって、孝之が寝たのは、夜の十二時をまわってからだった。

(豊、待っているだろうな。)

思わず、真剣に練習する豊の顔が頭をよぎる。孝之は学校までの道のりを

学習した日

月 日

全力で走った。

学校に着いたとたん、一人で練習していた豊に、

「孝之、遅いじゃないか。あと少しで試合なんだぞ。気持ちがたるんでるぞ。」と大声で言われた。むっとした孝之は、

「なんだよ。たかが練習試合じゃないか。それに練習試合に勝ったって、県大会にいけるわけでもないだろ。」と思わず言い返した。豊は、何か言いたそうに口を開きかけたが、何も言わず背を向けてしまった。そんなこともあって、豊とは何となくぎくしゃくしてしまい、孝之はその後、練習に参加しても集中できず、全く身が入らなくなってしまうた。

試合当日。孝之は、今までにないほど緊きんちようし、体が思うように動かなかった。いつもはミスしないサーブもうまくいかなかった。応援してくれるチームメイトの「ドンマイ。」という声を聞くたび、気持ちがあせるのが分かる。同じコート内にいる豊の視線も気になる。自分の思う方向にボールを飛ばそうとしても、コントロールが効かない。頭の中が真っ白になってしまった。結局、今まで負けたことのない相手にも、惨ざんぱい敗した。

試合に負けたショックで、孝之はだれの顔もまともに見ることができなかった。今日の試合のことを思い出すと、自然と涙があふれてきて、目の前の景色がぼやけて見えた。

「孝之、少し、ふたりで話そうか。」

ベンチでうなだれている孝之をみて、赤塚先生が声をかけてくれた。グラウンドは夕日を浴びて、オレンジ色に光っていた。

「幸手中、西中、幸手桜高校の校章に『たちばな』があしらわれているのを、孝之も知っているかな。昔、天保てんぽうの国学こくがく四大しやうだい人と称しょうされた橘守部たちばなもりべという国学者が、幸手桜高校のあたりに住んでいて、たくさんのお書物をのこし、多くの門人を育てたので、校章の『たちばな』はその偉業いぎやうを称たたえたものなんだよ。その人の書いた『待問雑記たいもんざっぎ』という書物のなかに、こんな一節があるんだ。『道を歩行あゆくに、江戸までと心ざせば、千住せんじゆにて足疲れ、越谷こしがやまでと心ざせば、大澤おおさわにてあしつかれ、粕壁かすかへまでと心ざせば、杉戸すぎとに



右から幸手中、西中、幸手桜高校の校章



て足疲るるものなり。これをおもえば志は高くたて、望みは大きく望みまでは半途に心倦れて、小き事をもなし肯がたきわざなるべし。』孝之には、この言葉の意味がわかるか。」
赤塚先生の問いかけに孝之は首をふった。先生はひと呼吸おいてから言った。

「道を歩いていくのに、江戸までと目標をもつと、その途中の千住で足が疲れ、越谷までと目標をもつと越谷手前の北越谷付近まで、春日部までとすると杉戸までで疲れてしまう。目標を高くもち、望みを大きくもたなければ、その途中で心がくじけ、小さい目標すら達成しづらくなってしまう、ということを書いてあるんだよ。」

先生の話聞いて、孝之ははっとした。豊との朝練や練習試合のことが次々とよみがえり、頭をガーンと打たれた思いがしたのだった。

翌朝、だれよりも早く来て、グラウンドで走る孝之がいた。いつも通り早くやって来た豊は、孝之の姿を見るといっしゅんびっくりしたようだったが、次のしゅん間、笑顔になった。孝之も豊の姿をみつけると、手をふりながらかけ寄っていった。豊に伝えようと思っ

● もっと知りたい「橘守部の言葉」

（『待問雑記』から）

「耕為んには、水田にまれ陸田にまれ、犁耕す時、鋤を深くいれんにしくはなし。鋤をふかくいれば立根もふかくのぶ。立根ふかく延ねば、苗の身も高く延す。穂ての物、立根の長さにしたがいて、身も延たつものなり。」

【現代語訳】

「土地を耕すには、水田であろうが畑であろうが、鋤を深く入れる方がよい。鋤を深く入れれば、立ち根も深く伸びる。立ち根が深く伸びなければ、苗の丈も高く伸びない。すべての作物は、立ち根の長さに応じて、身の丈も伸び立つものである。」